まちの情景と建築　世界編

田中 修一

［街並み］ 街路の店舗と清掃作業　ルクセンブルグ旧市街／リスボン／ポーランド・クラクフ／パリ

↑ルクセンブルグ旧市街　ベネルックス３国の最も奥に位置する小国だが、鉄鋼などの重工業とＥＵの金融センターを置く豊かな大公国である

ヨーロッパの町はどこでもそうだが、飲食店の席が歩道にはみ出しているのは当たり前の情景だ(日本でも都心では見かけるようになってきた。保健所や自治体、警察の許可がいる。ヨーロッパでは家具の形状、数、キャノピーやパラソルの色の制限もあるようだ)。歩道の幅は十分に広く、石やタイルで美しい模様貼りを施す。このスタイルは古代ローマからの伝統らしい。歩道の中央部分には正確な水勾配をとった排水溝(溝状に仕立てないケースも多い)が邪魔にならないように設置されている。

←ポルトガル　リスボン中心街シアード広場。地元出身の詩人アントニオ・リベイロの像が、歩道の吸殻を見て困っているように見える

スペイン、ポルトガル、イタリアの街はたばこの吸い殻を平気で道に捨てる習慣が今でも治っていない。平気でたばこが吸えるのもこの辺の国に限られているのも変だ。ポルトガルの歩道の石畳は、守護聖人サン・ヴィセンテにちなんで烏の黒石と聖人の純潔の白石の組み合わせによる職人芸のデザインが道ごとに違った姿を展開する。それは見事で美しい。それなのに、歩行者は平気で吸い殻をポンポン捨てる。雨でフィルターだけが残って石の目地（これが結構深い）に詰ってしまうのを目の当たりにするとがっかりさせられる。

その他のヨーロッパではご覧のようにゴミ一つ落ちていない。マナーが良いなあと感心するのだが、彼らもそれほど完ぺきではない。早朝にチャンと清掃人が高圧ノズルで歩道を洗いゴミを拾って集めている。フランスでもドイツでも東欧でも同様の光景を見る。ハワイのダイヤモンドヘッドを一望するホテル街の浜辺には、昔から吸い殻一つ落ちていない。あまりきれいだと汚す気にならなくなるのが人情で、市の清掃車が早朝から砂浜を徹底して掃除しているのはそうした狙いがあるのだろう。日本でもよいことは見習ったらいいだろうと思うのだが。

↑ポーランド　クラクフのかわいいごみ箱　　↑パリ中心街の朝のごみ収集。黒人も白人も混じって仕事をしている